あぶらむ通信

第２号　1988年５月28日　あぶらむの会発行

飛騨便り

露のとうの淡いにがみが春を運んで来てくれました。タンポポの咲く農道を走ると、遠いおとぎの国にいるような錯覚をおぼえます。まさしく百花繚乱、北国の春には一段と美しさを感じます。

あぶらむ通信をお手になる皆様にはお元気でお過ごしのことと存じます。

発足二年目を迎えたあぶらむの会も、遅々とした歩みの中にもいくつかの進展をみせています。その第一が土地取得です。皆様のご支援のおかげをもちましてあぶらむの里敷地5600坪の２／３の支払い（民有地部分）が完了いたしました。

昨年四月、私たちの生活を心配して高山を訪ねてくれた姉を、富山まで送って行きました。「宇津江四十八滝」という案内板を目にしたのでフラリと寄ったのが、私たちの運命的出会いとなったのです。滝には未だ残雪があり、少々薄暗い感じでしたが、南斜面の現在のあぶらむの里敷地だけはまばゆく輝いていました。「こんな土地が手に入れば」と、どう逆立ちしてもありえないことなので溜め息まじりに口にしたことが一年後に実現したのです。全くの驚きで、夢を見ているようです。これも一重にご支援下さる皆様と、この貴重な土地を提供下さった国府町皆様のご理解のたまものと、心より感謝しお礼申し上げます。残り１／３は国府町有地の1800坪で、支払い期限は明年三月末、土地取得という最初の難関もあと一息というところまでこぎつけることが出来ました。本当に恵みです。

三月末、私たち家族はあぶらむの里敷地近くへ引越ししました。国府町の紹介で野村晃氏というあぶらむの会へのよき理解者が与えられ、身分不相応の家をお借りすることが出来ました。私の人生の師である沖縄のライ園愛楽園の司祭だった徳田先生が、「アドナイ・エレ」－主の山に備えあり－という旧約聖書の言葉を用い、信仰に堅く立って生きることを教えて下さいました。私たちの行く先々に人が居て、出来事があり、全く無からの出発の私たちに土地を与え、家を与え、必要とする全てのものを備えて下さる、まさに「主の山に備えあり」、恐れることなく無の中に突き進んで行こうと勇気づけられている今日このごろです。私たちのこのような遊牧民的生き方のため、子供達の転校回数は申し訳無いほどの数になりました。子供達の成長も早いものでして長男博輔は中学二年、長女舞は中

学一年、そして次男次女の耕輔、友は小学校五年生になりました。立教に奉職した時生まれたばかりの友がもう五年生なのです。この間、彼らは今度の国府小学校で五つの小学校を経験することになったのです。「人生常に旅人たれ」――どのような環境、状況にあっても淡々と生きることを子供達に教えてきた私たちですが新しい学校に登校する日、子供達の背を見て、「しっかりやれヨ、すまないなァ」と一人つぶやく私でした。

今年の冬は暖かでした。薪ストーブのおかげもあって、飛騨の冬を初体験する家族にとっては穏やかなプロローグであったようです。引越しの際、残った薪がトラック二台分もありました。家族の逃亡を恐れるあまりいかに沢山の薪をためこんだことか。でも薪で暖をとることの暖かさと楽しさ、豊かさをおぼえたことは、冬の厳しいこの土地に生きて行く上で大きな収穫であったと思っています。そしてもう一つ気づいたことは、冬の厳しい寒さの中で暖房不十分な家であっても、一室だけ心より暖かな室があれば人間は寒さを恐れないということ、全館暖房など必要ないということです。殺伐とした人間砂漠の中にあっても、一カ所だけ本当のオアシスがあれば人間は挫折することなく生きて行ける、あぶらむの会の使命を見たように思います。家族が飛騨の寒さの中にいる間、私はフィリピンであぶらむの会としては初めての海外プログラム、「フィリピンキャンプ」を催しました。家を出た日が摂氏－１２度、マニラは摂氏３０度を越えていました。この温度差が世界の広さ、考えの多様さを教えてくれるように思います。第一回のフィリピンキャンプはスタッフを加え１９名の参加者を得ることができ、三菱銀行国際財団の助成を得て実現の運びとなりました。フィリピンでの経験は参加者一人々にとって大きな成長の糧となりました。「よく訪ねてくれたなァー」と相変わらず暖かく受け入れてくれるフィリピン、サガダ村の人々に感謝です。

（詳細後記）

四月、春風と共に新しい同労者がやってきました。あぶらむの会の働き手は別頁にて詳しく紹介させていただきますが、この一年間私たち夫婦が飛騨地で働き、西村正和君が東京で働いてきました。飛騨地でのさらなる働き手が求められていたのですが、四月に入り増山茂（24歳）、藤本隆（16歳）参加し、また六月からは島村幸明（29歳）、また尾針明宏夫妻が参加することになりました。一つ一つ年輪を重ねて行くあぶらむの会の今日このごろです。

四月末、私は大家の野村晃さんに鯉のぼりのポールにと杉丸太を無心しました。都会で十二分に泳ぐことのできなかった鯉を思いっきり泳がせてみたかったので

す。私の無心を快くきいて下さった野村さんに連れられ彼の持ち山に行きました。「あぶらむの会がまっすぐにのび、育つためにも欠陥のないやつを選ばないとなァ」といって、15メートルもある立派な丸太を切り倒してくれました。その時野村さんは、「白ペンキで目印してある木は三百年育てるようにと孫にいってある木なのだ」と云いました。三百年育てる、気の遠くなる話です。岩村昇ドクターはよく、「自分の目の黒いうちに結果の出るような仕事はろくなものではない。百年後のことを考えて仕事をするように」とおっしゃいました。木を育てるということはさらに長い年月を要するのです。しかし考えてみるに、私たちの先祖の生活の中には「百年」という時間の単位があったように思います。私たちの生の営みはちょうど鎖のようなもので、各々が一個の輪として完結しており、さらにその輪が過去と将来の各世代との間に確かな接点を持って連なっている。一つの輪が前後と確実に連なっている、人間でいえば三世代－百年が結ばれているのです。この百年後、孫の代のことを考えて今を生きるという視点が失われたところにものごとの混乱、消費生活のもたらす人間的荒廃があるように思えてなりません。「この木は三百年育てるのだ」三百年という時間が素直に心に響くから不思議です。

飛騨はこれから日々に緑一杯、あぶらむの宿が皆様をお待ちいたしております。どうぞ一度飛騨国府にまで足をお運び下さいませ。スタッフ一同心よりおもてなしさせていただきます。

皆様のご健康をお祈り申し上げます。

１９８８年５月　あぶらむの会代表　大郷　博

高山から国府へ　あぶらむの会の住所が変りました

〒509-41　岐阜県吉城郡国府町宇津江

Ｔｅｌ　０５７７７２－４２１９（本部）

０５７７７２－３８２８（宿）

＊たび重なる住所変更でご迷惑をおかけしています。もうこれ以上変わることがなくなりました。最後の住所変更、よろしくお願いいたします。

あぶらむの会初めての海外プログラム

第一回フィリピン・キャンプ報告

アジアの人々との生活体験を鏡として、日本の生活の在り方を考え直すこと、また歴史や文化の異い、そして過去の不幸な出来事〝戦争〟という現実をふまえながら、人と人とが理解し合うことはどのようにして可能なのか、私たちはフィリピン・キャンプのねらいとしてこのような視点を定めました。

キャンプ地サガダはルソン島北部山岳地帯にある寒村で、太平洋戦争末期のルソン島決戦の戦場となった村です。それは戦史に残る悲惨な闘いで、わずか八カ月の闘いで６０万人余の人々がこの地の土と化し、そしてその多くが病死や餓死でした。１９７９年に初めて村を訪ねた時、「お前の軍隊がここで何をしたのか承知の上できたのか」と私の胸をつかみ、くってかかってきた老人の黄ばんだ歯を今も忘れることができません。

しかし、「継続は力なり」で、当初我々のことを「トレジャーハンター」（山下将軍の埋めた財宝狩人）と信じて疑わなかった村人も、その訪問の意図を理解し、彼らの生活の奥深くにまで迎え入れてくれるようになりました。

今年は１４名の参加者と５名のスタッフで、２月２４日～３月１３日まで１９日間の日程でした。どの村も田植えのシーズンでした。この地方一帯は、「耕して天に至る」の言葉通り、山を拓いての段々水田。田一枚一枚を石で積み上げ、一千年以上の時をかけて営まれてきた全山丸ごとのこれらの水田は見事の一言ですが、その労たるや我々の想像を絶するものがあります。田は全て水牛でたがやすのですが、狭い所などは全くの人力。田にはいつくばるようにして手で田を耕すなど厳しい労働が続きました。このような経験を通して、一杯の御飯のありがたさが参加者に肌を通して理解されて行くのでした。

マニラでは、腐敗した権力者の夢の跡、マルコス時代のマラカニアン宮殿と、生ゴミ埋立地に生きるスラム街の人々の生活を目のあたりにしました。その落差はアジアの現状を考える貴重な原体験となりました。

また、先号でフィリピン・サガダ村孤児院支援のお願いをしましたが、１６名の方々からお申し込みいただきました。今回３０万円を現地でお渡ししてまいりました。本当にありがとうございました。詳細は次号でお知らせいたします。今後共、ご支援よろしくお願いいたします。

あぶらむの会スタッフ紹介

☆西村　正和

実践教育活動及び広島－長崎国際平和ウルトラマラソン担当

立教大学大学院教育学専攻課程修了、ＥＴＭ（EDUCATION THROUGH MUSIC)を専門とする。また、ボーイスカウトを通して体得した野外キャンプ生活技術やギリシャで開催されているウルトラマラソン「スパルタカスロン」（２４６km）を完走するなど、あぶらむの会の実践教育活動部門を支える強力なスタッフ。

東京にて広島－長崎国際平和ウルトラマラソンの実現に向けて活躍中。89年からはカナダへの武者修業を考えている。カナダ国籍の日本育ち、25歳独身。

☆増山　茂

あぶらむの宿の食事及び薫煙製品担当。

フランス料理コックとして日比谷松本楼などで修業。宿泊費3600円のあぶらむの宿の現状では腕の奮いようがないと嘆いている。しかし、嘆くなかれ、自然の素材が豊富な地にこそ料理の真髄あり。彼のつくる薫煙製品があぶらむの会の大きな生活源、よいものが出来上がりましたらご案内させていただきますので、その節はよろしくお願い致します。28歳、独身。

☆島村　幸明

立教大学経済学部卒。在学中、フィリピンにて１年間生活、卒業後、フリーのカメラマンとして生計を立てつつ、フィリピンにおける日系２世の調査・記録にエネルギーを傾ける。当会では、実践教育活動及び、自活のための営業活動及び支援担当。フィリピンでの愛称はカンポン（ドラム缶の意）29歳、独身。

☆藤本　隆

本年３月、千葉県市川市の中学を卒業、自らの人生を模索中。１年間あぶらむの会で働きながら、自分の将来を考えるとのことでお引き受け。　実によく働き、気のきき方などは大人顔負け。将来性は二重丸。彼のような青年を今の教育現場が育てられないところに、教育の貧困さを感じる。あぶらむの里の整地及び農業担当。16歳、我家の長男と２歳違い、お父ちゃんである私の困惑大。

☆尾針　明宏・恵子夫妻

千葉県松戸市にて食料品店を経営。店をたたみ国府町に引越し、側面からあぶらむの会を応援して下さる。大学では土木を専攻され、気象庁勤務、その後食品関係の仕事へ。絵画はプロ級、奥様はご主人とならばどこまでもとのこと。

☆大郷　育

我家のお母ちゃん、世間では5児の母とか。これまであぶらむの宿の料理を担当していましたが、今後は増山チーフの補佐役。現在は農業部門の責任者。東京育ちここにあり、よく頑張ってくれています。

☆大郷　博

死ぬ時は他者を巻添えにし、その人の人生を大きく変えた罪ですぐに地獄へ送られることが決まっている不届き者。あぶらむの会代表、実践教育活動及び土木部門担当。

☆あぶらむの会を取り巻く大勢の人々

これらの人々があぶらむの会の本当のスタッフかもしれません。今年は自活の一助にと、畑に稲作、シイタケやナメコにも挑戦しました。また、整地や、小屋作り、これらすべて周囲にいる人々が教えてくれ、手伝ってくれるのです。今後折を見てそれらの人々をご紹介させていただきたく思っています。

――――あぶらむの宿ご案内――――

昨年8月、あぶらむの里の敷地のすぐ側に「あぶらむの宿」（仮宿）を開設しました。昔ながらの土壁で新しい家ではありませんが、それなりの趣きのある家です。15～20名は宿泊可能です。是非1度お訪ねくださいませ。

交通手段　電車利用　　ＪＲ高山線飛騨国府、飛騨古川、飛騨高山下車
　　各駅まではお迎えにまいります。

　　自動車利用　　東京から中央高速道にて5時間、名古屋から3時間
　　ご連絡下されば、ルートマップお送りします。

宿泊費　　1泊2食　　３６００円　（小人２０００円）
　　昼食　５００円　　飲物別途料金

申込先　　「あぶらむの会」　☎０５５７７２－４２１９

シリーズ　いま、現場から

第1回　空洞化する「労　働」

荻野　登（週刊労働ニュース）

―― 様々な現場で活躍されている方々からご寄稿いただき、共に社会と人間について考えていくことをねらいとして、本シリーズを企画しました。――

昨年末、私の好きだった祖父が９０歳で他界した。おととしの夏、私が婚約相手を紹介するために北海道に帰郷した時、祖父はめずらしく饒舌で、私の年齢の頃まで何をして生きてきたかを語って聞かせた。その時祖父は、妻と子供３人を抱えながら３５歳で農地開墾のために荒野に立ったことをさりげなく語った。時代状況の違いはあれ、私達の前にもそれぞれ未開の地が与えられていると思う。それは祖父が対峙したような、厳然と立ちはだかるようなものではないかも知れない。当然のことながら、昔との違いは労働の中身が変わってきたことによる。私が仕事で知り合った哲学者の内山節氏の近著『自然と人間の哲学』では、労働がもつ意味合いの変化を、自然―人間関係の変容過程をたどりながら解明している。「石器、銅、土器、そして食物も含めて多くの『もの』が自然を加工するなかでつくられてきた。自然を労働の対象とみるとき、かつての人間たちは、その対象化された自然のなかに未来の使用価値をみていたのである。」ここでいう使用価値とは「この冬が越せるという感覚」を与えてくれる素朴なものだ。

ところが、商品経済が人々の生活に入り込むようになってくると、〝労働〟の意味が分断されてしまう。お金という擬制が本来は計量することができないはずの〝労働〟に一定の価値尺度を与えてしまったからだ。内山氏は、この過程を、ここ２０年来しばしば滞在している群馬県の一寒村の変化から、感じ取ったという。７０年代に入った頃から、〝労働〟を村人は「仕事」と「稼ぎ」という言葉で使い分けるようになったと語っている。「山里に暮らしてきた彼にとっては山の仕事だけが本当の仕事だった。それは儲ろうと儲るまいと度外視していかなければならない、本来の人間としての仕事なのである。ところが街の仕事はちがう。彼の気持ちのなかでは、街に働きに出るということはあくまで稼ぎに出ることなのである。それなら儲るものほどすぐれた稼ぎだということになる。」

私は、山里でのこうした象徴的変化が、実は企業社会の中でも、じわりじわり進んでいるような気がしてならない。ひとつは製造業で惹起している構造変化だ。

一昨年からの円高によって加速された産業構造調整の波は、鉄鋼、造船などの重厚長大産業を大きく揺るがせた。鉄鋼大手５社だけでも１７万人の従業員のうち４万人が削減対象とされる合理化計画が実施された。その一方で余剰人員を吸収すべく企業は、情報通信という未踏の分野に参入し、果てはうなぎの養殖やハム製造を始めるなど、そのサバイバル作戦の機敏さと奇抜さは日本人ならではのものであった。こうした製造業の状況とは裏腹に、このところ「お金」を操っている人々は元気だ。擬制としての「貨幣」を今や日本人は、金融商品や株などを使って利殖させる〝マネーゲーム〟を楽しむようになってきた。さらに地下高騰とも相まって、持てる資産家層と持てない勤労世帯とのギャップは深まりつつある。

ところで、サラリーマンは生き方そのものが問われる時代になってきた。日本的経営のメリットシステムとされてきた終身雇用が崩壊の兆しをみせているからだ。まず、高齢化の進行によって年功序列が亀裂をみせ、産業構造転換による企業体質改善が終身雇用制の維持を難しくさせた。多くの民間企業で６０歳定年が普及し、終身雇用の恩典が施されるようにみえても、実は出向・転籍さらには早期退職優遇制度で定年満了前に長く勤めた会社を去らなければならない人の方が多いともいわれている。それに加えてＯＡ化など技術革新の進展とパートや派遣社員の増加なども仕事の中身を大きく変える要因となっている。内山氏も取材で会った時、彼はその辺を「製造メーカーでは、ラインは外注・パート化、開発部門は外から技術者を寄せ集める。そうすると本社の人はその両方を管理するだけといった頭と足のない企業が出てきている。」と指摘した。こうなると人は単体の作業しかしなくて済むようになる一方、ますます自分が何をしているのか、その位置がわからなくなってくる。これは、今どこの職場でも大なり小なりに起こっているのではないだろうか。私達の職場ではこれを「仕事の空洞化」と呼んでいる。

私事ながらこの４月私は３０歳にして親父になった。自分の子をみていると、この子が２１世紀には、どんな荒野と向かい合っているのか興味がわいてくる。たぶんその頃は情報ネットワークによる新しいコミュニケーションが行われ、目の前にすえられたディスプレイの中にそれを見い出しているかも知れない。翻って私はといえば、五里霧中の中どこを耕せばいいのか模索中といったところ。しかし、いずれにしても今後は会社中心の職業観より「自分の仕事」といった観点が求められる時代になることは確かだ。自分なりのキャリアを積み重ねながら、とにかく現実の真ただ中でいきていくしかない。

広島―― 長崎　国際平和
ウルトラマラソン実現に向けて

実行委員会　西村　正和

1988年8月。真夏の広島―― 長崎間 437㌔を走り抜く、"広島―― 長崎国際平和ウルトラマラソン"が開かれます。

2つの被爆地を、その原爆記念日である8月6日から9日にかけて走るこのウルトラマラソン。それは核兵器のもつ非人間性と、その悲惨さを再確認し、スポーツを通して改めて世界の平和を問い、考えることを目的としています。

［ことの起こり］

そもそものきっかけは、毎年ギリシャで開かれている 247㌔マラソン、"スパルタスロン"での出来事。古の故事をもとに、アテネ―― スパルタ間 247㌔を駆け抜けるこのスパルタスロンは、数ある世界のウルトラマラソンの中でも、代表的なレースの一つと言われています。このレースに、1986年、日本チーム（大郷、西村）が参加した際、イギリス人ランナー、パトリック・マックが、広島―長崎を結んで走る、ウルトラマラソンを提案した事がきっかけで生まれました。

世界唯一の被爆国である日本において、2つの被爆地を結んで走るというかれの提案は、そのレセプションの場で発表され、そこに集まった世界各国のウルトラランナー達の熱意と、この企画の意義深さに動かされた大郷・西村は、帰国後、その実現の可能性を検討。1987年4月より準備委員会を結成し、その趣意に賛同する仲間とともに、準備を進めてきた次第です。

［実現に向けて］

広島―長崎 437㌔。この気の遠くなるような道のりを、ただひたすら走り続けようというランナー達がいるという事。そして、その彼らを支えているものが、平和への切実な祈願であるという事実を通して、私達は、改めて世界の平和を問い、考える機会をもちたいと考えています。

大会まで、あと僅か。1年目となる今年は、8名前後の招待選手によるトライアル大会を行うことになり、これまで、ランナーとの連絡、広島・長崎両市の訪問とコースの下見、スポンサーとの交渉、運営組織の編成など、様々な準備を進めて参りました。

皆様には、これまで色々な形で応援をして頂いて参りましたが、今後とも、宜しく御理解、御協力頂ければ幸いです。

尚、事前の事務局、本番での自動車伴走車、その他ボランティアスタッフなど、

更に募集中ですので、関心のある方は、下記連絡先までお問い合わせ頂ければ幸いです。

〒201　東京都狛江市西和泉2－5－407
広島－長崎国際平和ウルトラマラソン実行委員会
TEL 0424－84－5215

《《夏季プログラムのご案内》》

実践教育活動あぶらむの会では、教育現場に携わる方々、教育に関心のある方々を対象に、"育つこと、育てること"をテーマに8月中旬夏季プログラムを行うことになりました。いま、子供達を取り巻く教育環境は、登校拒否やいじめをはじめとして、とても恵まれているとは言えない状況にあります。また大人達もこうした状況に対してどのように関わっていけばよいのか手探りの状況にあると言えるでしょう。

そこで、昔から人と自然が共に育てあうことを生活の基本に据えてきた飛騨の地で、"育つこと、育てること"について共に語り合い、学び合いたいと思います。教育現場に携わる方々ばかりでなく、農業、林業、医師他、自然、人間に関わる仕事に携わっている方々の参加も歓迎いたします。

詳しくは、0424－82－2051　西田まで。

後援会事務局だより

昨年12月に開始した"あぶらむの里建設募金"は、お陰様で皆様のご協力により、順調に目標額に向けお申し込みいただいております。昨年12月末に第1回目、本年3月末に第2回目の土地取得代金の支払いを無事終え、"あぶらむの里"予定地の3分の2を取得することが出来ました。これもひとえに皆様の暖かいご支援の賜物と、後援会事務局一同感謝いたしております。本当にありがとうございました。

5月26日現在の、募金の申し込み総額及び振り込み総額は以下の通りです。

申し込み総額　1372万4671円

振り込み総額　1204万1784円

明年3月末に支払う残り3分の1の土地取得代金も含め目標額3000万円までとは、もうひと踏ん張りもふた踏ん張りもしなければなりませんが、実現に向けて事務局も精一杯頑張りますので、更なるご協力をお願い致します。

送金先　郵便振替　東京7－255427　あぶらむの会後援会

銀行振込　第一勧業銀行池袋西口支店　190－1434235

あぶらむの会後援会　代表世話人　八代　崇

事務局　〒182　東京都調布市染地3－1－373　西田方

TEL 0424－82－2051

○3月22日現在の募金申込者（順不同・敬称略,3月22日以降の方は次号にて）

杉浦進・恵美　大坪巌　川原久右衛門　木戸脇進　長谷川勉　竹内寛
八月朔日浩　阪下六夫　下畑美治　野中隆太郎　大宮司時四郎　小原優
森下藤次郎　西田武雄　戸谷敏男・直美　平木典子　園部秀穂・直子
壱岐健夫　財団法人キープ協会　中山貞江　上原有紀子　田島昌子
佐藤哲典　種谷泰治　倉田裕之　山野繁子　松田麻起子　倉坪和明
牛丸和浩　西村哲郎　三戸公　坪島行雄　米田博行　佐内坂教会
財満研三郎・由美子　政二清蔵　安藤実・陽子　西川征士　糟谷珠子
山下とみこ　松下洋一　水戸部賀津子　久世治靖　平野幸男　吉田仁
萩原久子　中山暁雄　沢田耕作　宮崎秀貴　富山マリア教会　岸元静江
岸元忠義　松井明子　天野儀一　安藤正和　美坂のぶ　米内義隆
木村絹子　高橋藤樹　篠宮慶次　三樹静枝　渡辺隆司　大塚ユニオン
市川聖マリア教会　矢部直美　広瀬秀人　白崎真二　新藤和夫　佐藤純
寺西裕子　今関公雄　萩原康宏　福原久美　上田敏明　中井しづ子
柴草忠　伊藤康夫　戸来祐子　W・F・ハナマン　甲藤善彦　浜野恒美
吉川仁　小川卓　水越光　後藤直之　深谷麻子　白旗定幸　吉川芳枝
小金井聖公会　寺田信一　青木道一・文子　宮崎晶子　佐藤あい子
大友正幸　宮田陽子　細川誠　田沼純雄　島村幸明　髙島光江・富美江
高橋秀　杉山まな　鈴木茂男　岡田彬訓　小西正捷　青山宏・民子
菊地武弘　逸見操　湊貴三郎　松岡ハル子　松岡真知子　松岡和夫

土屋宏之　清水博　るうてるホーム入所者・職員一同　藤倉待子　林英夫
加藤純子　橋本一夫　速水敏彦　須藤恵子　等農光人　小松英樹
桑山直子　寺本康郎　成井恵　城間真喜　水谷満　久保田豊　久保田順
嘉数弘子　石川眞安　田中紀子　手塚公子　座間幹生　佐々木茂
伊藤悦仕郎　新田和子　阿久津富男　戸田三三冬　橋本禮子　橋本久
小笠原すわ　石神耕太郎　原田大吉　神島二郎　上林由利　三原一男
村岡明　篠原陽子　木田献一　鴨下至治　滝沢助蔵　二ノ瀬宗男
徳田その　大城つる　斎藤英樹　谷昌二　八尾久美子　池原貞雄
西田昌弘　西田絵美子　山本照子　宇野直幸　浅見多佳子　関正勝
大橋忠雄　田中日出夫　浅井敬子　永原照明　片岡一枝　鈴木博士
神島洋二　屋比久良彦　新田智恵子　糸数宝善・敦子　大嶺佐智子
秋野京子　田嶋真広　太田泰彦　小笠原忍　細川哲士　池田サヨ
山城タケ　永田ナヘ　知念ノブ　嘉手苅米子　山城キク　島袋嘉助
斉藤孝　木曜会　浜谷早苗　吉河佳代子　形部賢　嘉綾子　東泰宏
安藤希代絵　橋政與志　清水昭夫　下田直春　島袋朝昌　吉野秀幸
中村邦介・順子　楡原伸　瀬下文子　平安女学院高校宗教部　桂英隆
中山貞江　新倉俊吾　小野田和義　1987年立教高校ＳＰＦ実行委員会
中島三郎　大和田勝　五十嵐正人　武原春美　坂口れい子　又吉亀次
宮崎知子　早川善治郎　川村幸子　Ｒ・Ａ・メリット　聖十字幼稚園
京都復活教会　川上章子　都竹康彦　西川貞子　小久保純一　黒井ミヤ
林晃　高浜匡　栗原彬　大道次子　加藤敏子　玉城カナ　山里つる
大澤あさか　比嘉マツ　細田祐子　藤原芳行　木村康一　中村久美子
篠崎孝　中村洋　近藤好正　宇野義方　村松一郎　内藤武　立教高校
鵜川久　池袋聖公会　黒川宜彦　外岡多美枝　長谷川正昭　松村行雄
松戸集会伝道所会衆一同　比嘉良行　高柳真　伊藤友昭　大山小夜子
広沢節三　小原孝子　関忠　山本恵志郎　田中有紀子　高野美知子
岩本正次　戸塚恭子　鈴木孝雄　間島和子　秋山順子　北村喜治
浅石郁子　大平仙次郎　大平真生　池田雅人　新谷加水　西川健二
権寧　波岡あかね　中村ひろ子　玉村宏　知念ハル　宮城正行・シズ
宮城タケ　中村裕樹　大坪秀夫　斎藤日丸　木村想一　藤本絹代
大味栄　立教女学院　中村芳枝　遠藤浩・恵子　首藤浩子　島袋栄喜
高橋正子　阿部潮音　由井正城　深谷剛敏　稲垣周介　村田恵次郎